

ずれにあるということも、中国の広大さと歴史の奥深さを示しているのだろうか。大会期間を通じて食事也非常に美味しかった。「食在広州、民族在雲南」というらしいが、過橋米線、火鍋、汽鍋鶏、宣良の焼鴨など、連日連夜の雲南料理も格別であった。中国での宴会に付き物のパイチュウでの乾杯がなく穏やかな食事であった。学生の皆さんはスパイスの利いた食事に胃腸の調子を崩したようだが、ベテラン勢は絶好調だったようだ。

ところで、本大会の日本人参加者 40 名の内、半数を超える 23 名が学部生、大学院生（中央大学、日本大学、法政大学、金沢大学、千葉大学、北海道大学、東京大学）であった。学生の参加数は 1996 年の台湾では 9 / 47 名、1999 年の韓国では 19 / 69 名（分母が日本人参加数、分子が学生参加数、大会名簿および大会報告より）であり、会を追うごとに学生の数と比率が上がってきている。私もはじめて参加した海外で行われた国際会議は、台湾での国際合同大会であった。JGU の国際合同大会が若手地形学研究者にとって国際会議への「登竜門」になりつつあるのだろう。これは、日本地形学連合のみならず日本の地形学の将来にとって、この合同大会が大きな役割を果たし始めていることを示している。「中国和日本は一衣帯水の隣国」、これは鈴木先生がフェアウェル・パーティーで紹介された言葉である。日本と中国は帯一枚の幅の水（日本海）しか離れていない隣国であるという意である。交通インフラと情報インフラが発達した現代、中国のみならず東、南、東南アジア、極東ロシアの各国も日本と一衣帯水の隣国である。次回開催地はタイともモンゴルとも聞こえてくる。JGU がイニシアチブを取る国際合同会議が、東ユーラシア地域の地形学の友好と将来にとって大きな役割を果たすことを期待したい。

最後に、本会議をすばらしい手腕で運営された TANG Chuan 教授をはじめとする中国側オーガナイズコミッティに感謝の意を表して本報告を終わりたい。

日中地形学合同学術大会 野外巡検報告

中央大学学生一同

鈴木将人（院）・三井伸吾（院）・村谷直樹（院）
山下守人（院）・渡邊聖子（院）・黒田裕昭（院）
笠木勇祈（学部）・河村佳英（学部）

2002 年 11 月に中国雲南省で行われた標記の学会は、私達にとっては海外での国際学会に初めての参加ということもあり、何もかもが新鮮に感じられ、とても貴重な経験を積むことができ、大変有益であったと思っております。11 月 17 日から 11 月 23 日の 7 日間にわたる開催期間のうち、初日に登録と歓迎会、第 2 日から特別講演、口頭・ポスター発表が 2 日間、残りの 4 日間は巡検（主巡検 3 日間、副巡検 1 日）という日程で進められました。ここでは、主巡検が行われた 3 日間について報告させていただきます。

11 月 20 日：午前 8 時半、宿泊先の教育賓館から、2 台のバスに分かれた参加者は昆明のほぼ北西に位置する元謀に向けて出発した。昆明の市街地を抜け、有料道路に乗り、大規模な地すべりなどを横目に、元謀に向かった。途中で立ち寄った厩（トイレ）は、仕切りがほとんどないと言ってもおかしくない状態で、日本との違いに驚かされた。舗装の不完全な道路のせいなのか、それともバスの運転手の荒っぽい運転のせいなのか、激しく揺られること 5 時間、ようやくその日の宿泊先の一つである元謀賓館に到着した。そそくさと昼食を済ませたあと、バスで 1 時間程かけて巡検の最初の目的地である「士林」へと向かった。士林の

ある場所は不思議で、周囲も同じ岩質のはずなのに、限られた地区だけに多数の土柱が発達していた。土林に到着した我々は早速、猛暑の中、日本から持ち込んだシュミットロックハンマーによる反発度測定を鈴木隆介先生の御指導で行った。巡検を忘れてフィールド（野外調査）に来ているかのようなようであった。その時のデータを Table 1 に示す。初めて目にする土林の風景は絶景と呼ぶにふさわしいものであった。出水時に土石流の様な形での下刻と雨蝕を受けてできた地形だと思われるが、改めて自然の力の凄さを実感させられた。2 時間ほど土林を散策した後、元謀賓館に戻ったのは午後 6 時であった。夕食は前日までの昆明料理に比べると、どこか質素に感じられた。夕食後、若手参加者はもう一つの宿泊先である亜熱帯作物研究所に向かった。翌日、この日の宿泊場所の片方は前日までとほとんど変わらず良いところ、もう片方というのは物音は聞こえるしシャワーは使えなかった、という話で盛り上がった。

11 月 21 日：2 日目は元謀原人遺跡と元謀原人博物館を回った。狭い山道を進むため、小型のワンボックスカー（タクシー）に分乗した我々は、車列を成して遺跡へと向かった。遺跡では、約 170 万年前に生存していたと言われる原人の歯が二つ見つかったところだそうで、記念碑も建っていた。しかし、予想に反して遺跡には住居跡などは何も見あたらず、発掘調査時の掘り返しのあとしか残っていなかったのは残念であった。その後、元謀市内にある博物館へ行き、元謀原人や 400 万年前に生存していたと言われている古猿人などについての展示を見学した。写真撮影が禁止されていたのは残念だった。博物館を出て、昼食まで時間に余裕があったので、市内の商店街でお土産を見たりしながらホテルへと三々五々歩いて戻った。昼食後、昆明へ向けて 5 時間のバスの旅が再び始まった。途中、山の急斜面に段々畑が広がっている眺めのいい場所があり、バスを降りて記念写真を撮ったりもした。昆明へ戻ってきたのは午後 6 時過ぎだった。夕食は、歓迎会も催された雲南の伝統料理を提供する昆明老食府での食事となった。ここでは、雲南風ラーメン（正式名称はわからないが）をいただくことができ、初めて味わうその味に舌鼓を打った。この日から、巡検前と同じく昆明市にある教育賓館に宿泊することになった。

11 月 22 日：学会も終盤に差しかかり、食あたりか連日の疲れがたまっていたせいなのか、体調を崩す人も出る中、3 日目の巡検が始まった。巡検の最終目的地は、昆明から南東へおよそ 100 km ほどの石林彝族自治州にある石林風景区であった。元謀とは違い、ここは観光地としても有名ところで道路もわりと整備されており、前日までと比べると心地よくバスに乗ることができた。石林に着いた我々は、石灰岩の石柱が迷路のように延々と乱立する中を彷徨いながら散策した。昼食後、鈴木先生の指示に従い、石林の石灰岩についてシュミットロックハンマー反発度を速やかに 3 地点で測定したところで石林巡検終了。石林を後にした一行は、水晶を取り扱う土産物屋と中国茶の専門店に立ち寄った。水晶店では瑪瑙が人気商品だった。お茶屋では本場の中国茶法を実演して見せてくれ、試飲させてもらい、巡検の疲れが癒されたような気がした。主巡検最後の晩餐は前日と同じ昆明老食府で催され、3 日間の巡検についての話などしつつ雲南料理をおいしくいただき、主巡検が締めくくられた。

主巡検を終えて、日本では見ることでできない珍しい地形を実際に自分たちの目で見ることをできたことをうれしく思います。欲を言えば、日本の場合のように地形図や地質図などの巡検資料があれば、より充実した巡検となったのではないだろうかと思います。

機会があれば、ぜひ中国の方々にも日本を訪れていただき、日本の地形を見ていただきたい

いと思います。今回の主巡検は、日本側から 39 人、中国側から 14 人の総勢 53 人の参加があり、雲南大学の唐川教授が案内して下さいました。唐教授を始め、学会の運営に携わった方々に感謝いたします。最後に我々、中央大学の学生は土木工学専攻なので、地形学的には物足りない報告になってしまったかもしれませんが、ご海容下さいますようお願いいたします。なお、何かの参考のために、我々の測定したシュミットロックハンマー反発度を Table 1 に示します。

Table 1. Rebound hardness with Schmidt rock-hammer test for some rocks in Yunnan, China.

The tests were performed by graduate students majoring in engineering geology, Chuo University, Tokyo, under the guidance of Prof. Takasuke Suzuki of Chuo University, during the field excursions of the Japan-China Joint International Geomorphological Conference, 20-23 November 2002.

No.*	Points tested	Lithology	Rebound hardness (%)			Elastic modulus (GPa)**
			Max	Min	Mean	
A-1	Side of earth pillar	fine gravel bed	15.5	12.5	13.5	1.4
A-2	Top of earth pillar	very fine gravel bed	17.8	13.2	15.4	1.6
A-3	Side of earth pillar	coarse sand bed including fine gravels	14.5	10.0	11.9	1.2
A-4	Top of earth pillar	coarse sand bed	15.0	10.0	12.2	1.3
A-5	Side of earth pillar	reddish brown coarse sand bed with cross bedding	26.0	20.0	22.9	2.8
A-6	Side of earth pillar	medium sand bed	20.0	15.0	17.9	1.9
A-7	Side of earth pillar	fine sand bed	18.0	12.0	15.5	1.6
A-8	Side of earth pillar	silt bed	19.5	15.5	16.8	1.8
B-1	Side of pinnacle with smooth surface	massive limestone	69.0	61.5	64.0	65.0
B-2	Side of pinnacle with lapies	massive limestone	64.5	55.0	61.2	52.5
C-3	Side of pinnacle	limestone with cracks	55.5	42.5	49.7	21.9

* A: Soil Forest (earth pillars), Yuanmau County, Yunnan, China.

* B: Stone Forest (karst pinnacles), Shilin County, Yunnan, China.

** : Elastic modulus (E) was converted from mean rebound hardness (R) using an empirical equation, i.e.

$$E = 10^{(0.0331R + 3.7032)} \times 9.8 \div 10^5.$$

日中地形合同学術大会 副巡検報告

石川一真・西地和貴・町田典洋（金沢大・院）

毎日どんよりとした天気が続く、寒さ厳しい初冬の金沢を出発してから約 21 時間の長旅のすえ、中国の雲南省昆明に到着した。昆明は初冬の日本海側からやってきた私たちにとっ